

書評

科学英語と論理的思考

評者 栗木 雅夫

通じる！
科学英語論文・
ライティングのコツ

尾鍋 智子 著
出版 2015/03
ISBN 978-4-87259-498-0 C3082
A5 158頁, 本体 1,800円+税
大阪大学出版会



本書は科学研究者を対象にした英語論文の執筆のための指南書である。著者は科学史、英語学習の専門家として、ハーバード大で修士、総研大で博士を取得後、内外での研究活動を経て、現在は大阪大学特任准教授。

大学で教鞭をとって改めて感じることは、英語で論文を読んだり、書いたりすることは、学生にとってとりわけ敷居が高いという点だ。その理由は、文法などの英語についての知識不足ではなく、その論理的構造への不慣れである。その証拠に、学生が最初に書く日本語の論文も、多くの場合、最大の問題は論理的な構造の不在、あるいは破綻である。ただ、日本語という言語の特性（論理的に曖昧である）と、母国語であるための「無意識の補完」により、日本語の論文のほころびは小さく見える。しかし、慣れない英語という論理的な言語による記述を試みた途端、主張の曖昧さ、論理的な未熟さにより、筆を進めることができなくなるのである。問題は、英語ではなく、論理的構造の構築にいかにか習熟するか、である。

本書の冒頭、著者は英語の子供向けの本の中で、感想文とは、1) 何が問題か、2) その問題はどのように解決されたか、3) その過程についてどう思ったか、を書けばよろしい、という一節をみて驚愕した、と述べている。このような明晰な説明を与えず、ひたすら日本語を情緒的にしか捉えないのが日本の日本語教育であり、英語で論文を書けない遠因はそこにある、と言いたげである。

ならば論文（英語でも日本語でも同じである）の構造をしっかりと把握しよう、と言うところから話は始まる。

本書の提示する論文の構造は極めて論理的に整理され、それを読むだけでも清々しい。学ぶべき課題は三つ。1) 全体構造やパラグラフの正しい配置、2) パラグラフ内の正しい文章配置、3) 論文に適切である明晰な文章表現。多くの指南書は3)が中心となるが、本書ではむしろ1)と2)が重視される。

著者は、論文全体の基本的構成は、一般的事実から始まり、特定の事実や主張（論文の本体）を経て、最後に一般化へと繋がらなければならない、と主張する。著者はそれを砂時計構造と呼んでいる。すなわち論文の中核となる「狭い」特定の事実や主張を、一般的な事実から説明し、最後に広く一般化するというものである。以下、イントロ、本体、議論とまとめ、等がそれぞれ内部にどのような構造を持つべきかが述べられる。著者の主張の通り、見通しのよい文章が続く。

現在では日本の大学も英語論文の執筆を念頭にして教育に力を入れているが、私が学んだ当時は「自分で何とかする」のが常識であった。それはまさしく、感想文とは何か、という明晰な説明を受けないままに、感想文の宿題に苦悶した（あるいは苦悶している）小学生と同じである。本書は演習例題が含まれており、これから英語論文を書こうという学生に読んで欲しい本である。一方で、これまで、英語の論文で苦勞してきた研究者にも、価値のあるものである。その読後感は、今まで感じてはいたが、うまく説明できなかったことが、言語化され、論理化され、すっきりと理解できた時に感じるそれである。

(広島大学先端物質科学研究科)